

## 日光街道を歩こう

(浅草～千住)

本来は日本橋からスタートしたかったのですがちょっと距離が長くなるので最初の一里塚があったという浅草からスタートします。途中寄り道しながら北千住駅(千住宿)まで歩きます。

### 記

■日 時：平成 30 年 3 月 15 日(木) 8 時 55 分集合

■集合場所：所沢駅 池袋行ホーム中央階段下

■見学場所及び時間：コース全長約 7.5km

所沢駅(8:58 準急)…池袋…上野…銀座線浅草駅(10:08)

⇒雷門・一里塚跡⇒姥が池跡⇒待乳山聖天⇒山谷堀

⇒東禅寺(六地藏)⇒昼食⇒旧吉原⇒山谷地区⇒回向院⇒芭蕉像

⇒素盞雄神社⇒荒川ふるさと文化館⇒千住大橋⇒橋戸稻荷神社

⇒奥の細道プチテラス⇒一里塚跡⇒勝専寺(赤門寺)⇒千住本陣跡

⇒北千住駅、日暮里、池袋經由所沢(17 時頃帰着予定)

■交通費(所沢から)：約 1,350 円 ■入館料：100 円

■昼食：11:30～ [ニューブラシッダ浅草店](#)(インド料理)

電話：03-6458-1411

■散策先簡単ガイド

<姥が池跡>

昔、このあたりは浅茅ヶ原と呼ばれており、一軒屋に老婆と娘が住んでいました。そして、娘が連れ込んだ旅人が眠った時に、老婆が頭を石枕で叩いて殺し、金品を奪っていました。ところがある夜、娘が旅人の身代わりになり死んでしまいます。老婆はそれを悲しみ、悪業を悔やみ、池に身を投げて死にました。その後、人々はその池を姥ヶ池と呼んだといひます。

<浅草一里塚>

昔から塚はなく標木のみがある一里塚だったようですが、現在は痕跡もありません。場所は二説あってそのうちの一つが浅草文化観光センターのあたりということです。

## <池波正太郎の碑>

待乳山聖天の脇に池波正太郎の石碑があります。池波正太郎はここ旧浅草区聖天町に生まれました、このあたりも度々作品に登場しています。

## <待乳山聖天(まつちやましようでん)>

「待乳山聖天」は浅草寺の一山、正式には「本龍院」といい、十一面観世音菩薩と大聖歓喜天(聖天)様を祀ります。

シンボルは二股大根と巾着 大根は人間の迷いの心、瞋(いかり)の毒を表し、大根を供えることによって、聖天様がこの心の毒を清めてくださるのだといいます。巾着は財宝、即ち繁栄。身体を丈夫にし、良縁を成就し、慈しみ深く、夫婦仲良く末永く和合(二本の二股大根が……)を保っていく。家も富み心豊かに…これが聖天様の功德です。



聖天様とは諸説ありますが、インドの神ガナバティか、またはシヴァ神の息子であるガネーシャだといわれています。世の人々を怖れさせ、困らせていた邪神でしたが、十一面観世音菩薩に感化されて仏道に帰依、仏法の強力な守護神となった天部の神様です。(世田谷の善養寺では象の姿をしていました)

待乳山聖天は少し小高い処にあるため、駐車場から本堂まで、多分日本一短いモノレール「さくらレール」があります。こんな短いモノレールですが途中駅もあります。



## <山谷堀と吉原>

今戸橋から山谷堀公園にはいります。ここは山谷堀のあとで、吉原への道の一つで、猪牙(ちょき)舟を仕立て吉原に行くのがおだいじん遊びだったそうです。この山谷堀を歩いて吉原の大門まで行って見ましょう。昔の吉原の雰囲気は残っているのでしょうか? かつては山谷堀脇の土手にあった見返り柳が吉原大門の交

きぬぎぬの うしろ髪ひく 柳かな  
見返れば 意見か柳 顔を打つ

差点の脇にあります。日本堤をこのまま行くと三ノ輪に浄閑寺があります。ここは投込寺と言われ遊女たちが無縁仏として供養されています。

## <東禅寺・江戸六地藏>

江戸六地藏の二番目があります。江戸深川の地蔵坊正元が、宝永3年(1706)に発願し江戸市中から広く寄進者を得て、江戸の出入口六箇所(六箇所)に丈六の地蔵菩薩坐像を造立したものです。像高はいずれも270cm前後で造立時には鍍金が施されていました。現存する第一番から第五番まで、すべて東京都指定有形文化財に指定されています。



	街 道	寺 号	造 立 年	所 在 地
第1番	東海道	品川寺	宝永5年(1708)	南品川三丁目
第2番	奥州街道*1	<b>東禅寺</b>	宝永7年(1710)	東浅草二丁目
第3番	甲州街道	太宗寺	正徳2年(1712)	新宿二丁目
第4番	中山道	真性寺	正徳4年(1714)	巢鴨三丁目
第5番	水戸街道	靈巖寺	享保2年(1717)	白河一丁目
第6番	千葉街道	永代寺*2	享保5年(1720)	富岡一丁目

\*1：奥州街道の宇都宮以南は日光街道と同じ

\*2：明治元年の神仏分離令により、旧永代寺が廃寺になり取り壊された

## <旧山谷地区>

吉原のそばなので、江戸時代から安宿が集まる場所でした。現在も簡易宿泊所の施設が多く、日雇い労働者が集まっていた地域です。今は山谷という地名はなく、台東区清川・日本堤・橋場と荒川区南千住にまたがる地域をいいます。

## <泪橋>

泪橋は、小塚原刑場跡の近くで今は暗渠になっている思川(おもいがわ)にかかっていた橋です。小塚原は山谷地区の北端にあり、刑場に行くには地区のはずれにあるこの橋を渡りました。泪橋は、罪人にとってはこの世との最後の別れの場であり、家族や身内の者には、処刑される者との今生の悲しい別れの場です。お互いがこの橋の上で泪を流したことから、この名が付けられたものです。

鈴ヶ森刑場跡の近くの立会川にかかっていた旧東海道の橋も泪橋でした。

## <小塚原刑場跡>

墨田区の回向院の住職が、刑死者を供養するため創建したのが常行堂で、その後、小塚原回向院となり処刑された罪人を葬りました。

そして現在、小塚原刑場跡地には、小塚原回向院から分院独立した「延命寺」があり、罪人を供養するために寛保元年に造立された「首切地蔵」が安置されています。



## <小塚原回向院>

常磐線の線路を越えたところに回向院があります。回向院の壁には「解体新書」の扉絵がついた記念碑があります。解体新書が作成された当時、解剖などは出来ないのですが、ここでは**刑死者の解剖（腑分け）**が行われていたのです。解剖にあたっていたのは「虎松の祖父」と呼ばれる老人で、肺、心臓、胃などを正確に切り分けて説明しました。この様子が“ターヘル・アナトミア”の解剖図と一致していたことから、前野良沢や杉田玄白はその意を強くし、その後、難解なオランダ語の翻訳に苦しみながら「解体新書」を作り上げたのです。



回向院の墓地に、一般の方の墓地と分けられている場所があり、「安政の大獄」で処刑された有名人たちの墓地があります。

・明治維新への精神的指導者と云われる「吉田松陰」、開国派として危険視された「橋本左内」、更に著名な幕末期の儒学者で、「頼三樹三郎」、「梅田雲浜」といった幕末の思想家たちの墓所があります。

なお、吉田松陰の墓は、高杉晋作らによって世田谷区若林に改葬され、その後その地に松陰神社が建立されたので、ここには当時の墓石だけが文化財と



して保存されています。因みに政治犯であった彼らの処刑は、小塚原刑場ではなく伝馬町牢屋敷でしたが、罪人として回向院に葬られました。

・**桜田門外の変**（安政7年）で、実際の襲撃には不参加でしたが、水戸浪士で総指揮者の「**関鉄之介**」をはじめ多くの元水戸浪士たちも眠っています。

この他、昭和の「**二・二六事件**」（昭和11年）の**磯部浅一**の墓所や桜田門外の変の後に起きた「**坂下門外の変**」（文久2年）などの討幕運動に関連した処刑者の墓があり、まるで歴史の教科書を読んでいる様な寺院なのです。

その一方で教科書には出てこない有名人もおり、その代表格が「**悪役四人組**」です。「**鼠小僧次郎吉**」、通称直侍、河内山宗俊と共に悪事を働いた「**片岡直次郎**」、明治初期の稀代の悪婦として知られ、最初の夫を毒殺後、各地を放浪しながら悪事を重ねた「**高橋お伝**」、江戸時代の侠客で、喧嘩で深手を負った自分の片腕が見苦しいと、子分に鋸で切り落とさせた伝説の持ち主「**腕の喜三郎**」こういった一癖も二癖もある罪人が、全て小塚原刑場で処刑され、回向院に葬られたのです。なお、鼠小僧次郎吉の本来の墓は墨田区の回向院で、ここには義賊に恩義を受けた人々が建てたとされています。また、プロレスラー「**カール・ゴッチ**」の墓が最近アントニオ猪木によって建てられています。

「**吉展ちゃん誘拐殺人事件**」の吉展ちゃんが、ここにある村越家の墓所に眠っていますが、境内に「**吉展地藏尊**」が建立されています。



関鉄之助



坂下門外の変の処刑者



左から鼠小僧治郎吉、片岡直次郎  
高橋お伝、腕の喜三郎

回向院については Travel.jp の Naoyuki 金井さんの旅行ガイドを参考に抜粋作成したものです。 <http://guide.travel.co.jp/article/8701/>

### <素盞雄神社>

南千住、三ノ輪、三河島、町屋など 61 町にも及ぶ区域の総鎮守。延暦 14 年（795 年）役小角（えんのおづの）の弟子・黒珍が、スサノオ大神・アスカ大神の二柱の神が降臨した奇岩を祀って創建したと伝えられる。ご鎮座 1200 年をむかえています。また、ここに芭蕉の句碑が立っています。

### <荒川ふるさと文化館> 入館料 100 円

郷土あらかわに関連した考古・歴史・民俗資料の展示をしています。



### <千住大橋>

橋が架けられたのは徳川家康が江戸に入府して間もない文禄 3 年（1594）のことで、隅田川最初の橋です。当初の橋は現在より上流 200m ほどのところであったといわれます。

### 奥の細道・矢立初め

元禄 2 年（1689）松尾芭蕉は、門人曾良を伴い江戸深川から船に乗り千住から奥州、北陸、美濃へと旅立ちます。

“千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそゝぐ。行春や鳥啼魚の目は泪是を矢立の初として行道なをすゝまず。”

江戸の外れの千住で船から上がったのですが、荒川区では江戸のうちである南から上がって、千住大橋を渡って出発としています。素盞雄神社には文政三年に建てられた矢立初めの句碑が建ち、南千住駅前には芭蕉像があります。



一方、足立区では荒川の北側から上がったと考へ、千住大橋を渡った橋の袂には「奥の細道 矢立初め」の碑が建ち、その先には「奥の細道 プチテラス」が作られており、矢立初めの芭蕉像等があります。



## <橋戸稲荷神社>

このあたり川越、飯能方面の物資の集積所として栄えた。千住宿の人々の信仰を集め現在に至るといふ。拝殿の扉の内側に伊豆長八の鰻絵があります。



## <千住宿>

五街道の整備に伴い、千住宿は日光・奥州街道の初宿に指定されました。千住宿の開発は、交通量の増大により宿場町と共に町域の拡大がすすめられました。荒川に千住大橋がかけられ、千住の地は江戸（日本橋）から2里、奥州・水戸両街道の江戸への出入り口の関門として急速に発達しました。天保14年（1843）千住宿には本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠55軒が設けられていました。宿内の家数は2,370軒、人口は9,456人でした。

江戸日本橋を出て最初の宿である、東海道品川宿、甲州道中内藤新宿、中山道板橋宿、日光・奥州道中千住宿は江戸四宿と呼ばれ、地方と江戸の文化や産業の結節点であると同時に、江戸人の遊興の地でもありました。旅に出る人を見送るのも四宿までです。

奥の細道プチテラスを過ぎて旧道に入ると、家々の前に昔の屋号や説明を書いた説明板が出て来て宿場町だった雰囲気が見えます。やっちゃ場（青物市場）があったので、その関係が多いのですが店を持たず、競り落とした品物を大八車で神田や京橋の市場へ売りに行った投師(なげし)の標示もある。昭和初期には投師は150人いたそうです。



## <千住一里塚跡>

東京芸大前交差点の南東隅に日本橋から2里目の一里塚と問屋場跡の碑があります。

## <千住宿問屋場跡 貫目改所跡>

宿場は、幕府の許可を得た旅行者に対して、人足と馬を提供することを義務づけられており、この問屋場で、人馬の手配をしました。街道の向かい側には、馬寄場がありました。また、貫



目改所が設けられ荷物の重量検査のための秤が備えられました。馬に積める荷物には制限があり、四十貫目(150kg)を積むと大馬、20 貫目あるいは人が乗って 5 貫目の手荷物を積んだものを軽尻と呼び、次の草加宿までの運賃が定められていました。貫目改所は、ここを出ると宇都宮までありませんので重い荷物を制限内と認めてもらえるよう、賄賂が飛び交ったとの話もあります。

#### <森鷗外旧居 橋井堂森医院跡>……足立都税事務所工事で、撤去中？

森鷗外の父静男は、元津和野藩亀井家の典医でしたが、東京府から郡医を委嘱されて千住に住んだ。明治4年郡医を辞し、橋井堂医院をこの地に開業した。鷗外は19歳で東京大学医学部を卒業後、陸軍軍医副に任官し、千住の家から人力車で陸軍病院に通いました。こうして明治17年ドイツ留学までの四年間を千住で過ごしました。(場所不明で見学できません)

#### <勝専寺(赤門寺)>

寺伝では文応元年(1260)に草創されたといえます。江戸時代に日光道中が整備されると、ここに徳川家の御殿が造営され、徳川秀忠・家光・家綱らが利用しました。

本尊の木造千手観音立像は千住の地名起源の一つとされます。地元では赤門寺として昔から親しまれ、1月と7月の15日、16日のみ閻魔堂の扉が開かれ公開されます。お参りすれば日頃の非を許してもらえる上に、万病、特に喘息や扁桃腺などの喉の病気に靈感あらたかといわれています。

#### <本陣跡>

100円ショップの前に本陣跡の石碑と路地に案内板があります。本陣は千住宿ではここ1ヶ所だけでした。敷地は361坪、建坪120坪であったと記録されています。

**見番横丁**：千住には遊女を置いて良い旅籠が50軒程あり、これが明治になって禁止されると千住芸妓組合ができその事務所(見番)がありました。大正18年花街は千住柳町に移りその後昭和18年まで営業していました。

<帰路> 北千住(常磐線)一日暮里一池袋一所沢着 1時間強  
17:00頃所沢帰着予定